

モラロジー研究史における 人間観・自己観の特徴と課題

——「価値実現」から「意味創造」に向けた対人援助論アプローチ——

木下 城康¹⁾

目次

はじめに

1. 『道徳科学の論文』における人間観の特徴
2. モラロジー研究史における人間観・自己観の特徴
3. 同化型人間観と自己構成論の比較
4. 今後の課題と展望—セルフ・アイデンティティとアダプタビリティ

はじめに

平成 29 年の「伝統の日」にモラロジー研究所は、創立 100 周年に向けて「道徳で人と社会を幸せにする」方針を宣言した。学校教育の道徳教科化とも相まって、モラロジー研究所には、道徳の多様な定義や意味を取り入れたモラロジーの提示が要請されている。

モラロジー研究の立場からみると、筆者はこの要請に応える倫理道徳への接近法の一つとして永安（2011）が紹介したナラティブ・アプローチを継承、発展させることで対応できるのではないかと考えている。具体的には、価値実現論から「意味創造論（meaning making）²⁾」への転回を指し、当研究センターで発表を重ねてきた³⁾。人生設計の責任が個人に委ねられる時代では、大きな物語としての価値や理想の実現から、社会や対人援助者に関わるなかで個別に意味を創造する機会が求められるようになっていく。

その際に課題となるのは、基盤となる人間観・自己観である。キャリア支援による対人援助論の立場に立つサビカス（2011/2015）は、実践に主眼を置く理論には柔軟性⁴⁾が必

1) 公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター教育研究室研究員 E-mail: jkinoshi@moralogy.jp

2) サビカス（2011/2015）は自己構成カウンセリングの主眼は「意味作り（meaning making）」にあるとする。

3) 筆者の報告には、木下（2016）「現代社会のセルフ・アイデンティティ形成とその援助」、木下（2017）「自己形成論から読み解く、サビカスのライフデザインアプローチ」、木下（2018）「“Meaning, Relationships, Engagement”時代における「徳」の扱い方—対人援助論における社会構成主義的アプローチ—」がある。

4) サビカス（2011/2015）は、「変幻自在（protean）と境界がないこと（boundaryless）が新しいキャリアのメタファーである」、「変幻自在という形容詞は柔軟（flexibility）で変わりやすく、適応的であることを意味する」（サビカス、2011/2015、21）と述べている。

5) 昭和 10 年（1935）11 月 29 日道徳科学専攻塾第二期科卒業式講演録『資料が語る廣池千九郎先生の歩

要だという。かつて廣池は道徳科学専攻塾を「ゴムのような学校⁵⁾」と形容したが、時代はモラロジー理論の柔軟性を問うているといえるだろう。廣池の道徳学においては、自己は宇宙・自然・神（本体）・伝統と同化する／できる⁶⁾ものとして捉えられており、仮にこれを「同化（conforming/accord with⁷⁾）」型人間観とすると、現代の要請は「構成（construct）⁸⁾型自己観に立つ実践理論であり実践的総合力⁹⁾だ」と考えられる。

本論では、こうした視点から今日的な課題に応えるために、人間観と自己観に焦点を当てて、モラロジー研究史における同化型人間観モデルから構成型モデルへの変遷の過程を整理することによって、意味創造に注目する構成的アプローチの位置づけを明確化し、自己・アイデンティティの構成を支援・援助することが環境への適応につながることを確認したい。なお、時代的背景を考慮して、廣池が『道徳科学の論文』¹⁰⁾（以下『論文』）（1928）で扱った人間観と、それを継承し発展させてきた道徳科学研究所研究部、モラロジー研究所研究センターの人間観・自己観は、区別している。

1. 『道徳科学の論文』における人間観の特徴

1.1. モラロジー「研究」事業の再開

1.1.1. 「苦難の時代」（1956）

モラロジー研究史の近隣領域にある廣池千九郎研究史における時代区分を扱った橋本（2015a, 2015b）が指摘しているように、廣池千九郎研究の急速な展開の契機には『廣池千九郎博士 生誕百年記念論文集』（以下『記念論文集』）（1966）がある。

廣池千太郎¹¹⁾の序文によると、昭和31年（1956）に道徳科学研究所に研究部が設置さ

み] 収録, 514-515

6) 「同化」については、本論2.2注37参照。

7) Chikuro Hiroike (1942/1966) “The work of human salvation has always been regarded in all religions as conforming to the Will of God”, 200. “This new way of bringing about human salvation must be approached by being in complete accord with the Will of God and the teachings of the Sages”, 201. 廣池千九郎（1930）『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』の英訳版。

8) ここでの構成型は、社会構成主義（Social constructionism）を指している。Constructivism（構築主義）と混同されることがあり、2018年現在では訳語（構成と構築）の使用も一定していない状況にある。本論では次の岩壁（2010）に拠っている。「社会構成主義の立場は、構築主義（constructivism）とよく混同される。確かにどちらも実証主義パラダイムに特徴的な「普遍的な真実」を仮定しない立場をとる点で似ている。構築主義は、対象者の視点にできるだけ近づこうとするが、ポスト構造主義や社会構成主義は、対象者の視点へと近づくことよりも、それがどのようにして社会的・政治的・文化的な要因によって作り出されるのか、研究者の立場から分析しようと試みる。また、構築主義は、個人が内的現実や意味を作り出すプロセスに焦点を当てるのに対して、社会構成主義は、そのような主観的現実が社会的プロセスにどのように影響を受けているのか、ということに注目する。そこで、この2つの立場は、対立・矛盾するというよりも、相補的である」（岩壁, 2010, 28）。また、Graham B. Stead (2014) は“Social Constructionist Thought and Working”のなかで、「社会構成主義の簡潔な説明や定義を提供することは難しい。なぜなら、社会構成主義の構成要素は何かについて、見解の一致した定義や概要さえないからだ（略）。多かれ少なかれ似通った方法で社会科学を理解するアプローチの集合（Stead, 2014, 46）」と説明しており、また「social constructionism は主に米国で広がり、言語を媒介に主観的に世界を創り出すこと」（同, 47, 脚注）と述べている。

9) 岩壁茂、奥村茉莉子、金沢吉展、野村朋子（2018）「心理職の『実践的総合力』の習得に向けて」明治安田こころの健康財団, 1

10) 廣池千九郎（1928）『道徳科学の論文』（新版9冊, 1985, 1986, 1987, 1988）

11) 廣池千太郎（1922-1989）。1968年から道徳科学研究所所長、廣池学園理事長、麗澤大学学長、同教授、麗澤高等学校・麗澤瑞浪高等学校校長に就任。（『廣池千太郎選集』, 1990）。廣池千九郎の孫にあたる。

れるまでは、モラロジーの学問的研究は「博士の死後一歩も前進しないまま」であった。廣池千九郎没後の1938年から1956年までは「学問としてよりは教義体系として」受け止められており、「学問研究の土壌はなかった」ため、「実践規範としてのみ受けとめ」られてきたモラロジーを「研究対象に置き換えよう」としたが、「ともかくはじめは苦難の時代」であったという。この研究部設置が行われた昭和31年（1956）は、教義体系として受け止められていたモラロジーの研究が廣池以外の者によって再開されたという意味で、「研究」事業の再開の年とみなすことができるだろう。その成果は10年後の1966年に『記念論文集』の形でまとめられる。

1.1.2. 廣池道徳学からモラロジー研究へ（1966）

1956年に研究事業が再開され、それまで教義体系と受け止められてきたモラロジーの研究は「研究部が開発活動にピタッとくっついて、ようやくその存在が認められる」ようになり、次第に「博士の学統を受け継ぎ、解釈としての学・開発部門へのサービスとしての学に加えて、新科学としてのモラロジー大成」に向けて、昭和41年（1966）の『記念論文集』発行を迎える。この時点のモラロジー研究における人間観・自己観はどのようなものだったのだろうか。

1.2. 『道徳科学の論文』の人間観、三つの特徴

モラロジー研究の初期において大塚（1966）は、廣池千九郎の道徳思想を理解するにはモラロジーに現れた人間観を整理する必要があるとして、『論文』第14章「最高道徳の原理・実質及び内容」の人間観を5つにまとめた。それぞれは、①人間の本性（本能）、②人間の生活（人生）、③人間の諸性質、④人間生活の意義・目的、⑤人間尊重の思想、である。この区分を基礎にして、さらに次のように整理することができるだろう。

(1) 人間の本性は、善悪いずれでもないが、現代人（1928年当時）は利己的（悪）である

上記のうち「①人間の本性」と「④人間生活の意義・目的」に注目してみると、人間の本性は善（道徳的本能・自己犠牲の本能）と、悪（利己的本能・自己利益の本能）の二つを含み、どちらも決めがたいもので、発達によってどちらにもなると断った上で、廣池は人間の精神作用と行為は利己的（悪）になっている、と指摘した。

(2) 利己的（悪）なのは、①自然の法則②聖人の教え③神（本体）への信頼から外れるからである

その背景には、人間の生活が①自然の法則に合致すること、②聖人の教えに基づくこと、③本体（神）に信頼することによって成り立ってきた（大塚，1966，5）と考える廣池の人間観がある。廣池の人間観は、自然の法則に違反すること、逃れることは悪と考えるものであり、『論文』の基礎をなしている。その上で廣池は次の点を強調する。

(3) 人は、自由意志（操作可能な精神作用）によって上記3点に合致すれば、永続性に価値をおく発達・進化が保障される

廣池が認める人間の自由意志は上記①から③のうち、特に自然の法則に従うかどうかを

決める意志を指している。そして、廣池の道徳学では自然の法則に合致することによって生存・進化・発達ができると考えられており、諸法則に合致するような積極的な努力が推奨される（大塚、1966、15）。

永続性に価値がおかれるのは、廣池が考える幸福には人類全体と個人の幸福が共に含まれているからである。自由意志による選択によって自然、聖人、神（本体）の法則に従うことで、自己は最高品性が得られ、それが自他や社会、ひいては人類の幸福増進につながる。最高品性の獲得が人生の目的となると説明される。その手段は最高道徳の実行であり、主眼は精神作用（心使い）に置かれる。

このように、『論文』における人間観は永続性に価値を置き、自然の法則に合致する生き方を「人類¹²⁾」に求めている。その背景には、自由意志（心使い）によって法則に違反する生き方を意識的あるいは無意識的に選んでいるとみる人間観があり、法則に違反する自由意志を利己心と位置づけて悪と評価した。この法則に違反する生き方を「悪」とする見方は、モラロジー創建以前の『日記』¹³⁾や『助け一条の御話』¹⁴⁾にもみられ、廣池の人間観に大きな影響を与えたとみることが出来そうである。その文脈で利己心は「埃」と例えられ、祓わなければならない対象として扱われている。

2. モラロジー研究史における人間観・自己観の特徴

2.1. モラロジー研究史における人間観の変遷と3つの立場

『モラロジー研究』を中心に人間観・自己観を整理すると3つの立場が確認できる。

- ①廣池の道徳学で説明された価値や理想を扱う立場
- ②廣池の道徳学で説明された価値の実現に主眼を置く立場
- ③廣池の道徳学で説明された価値を解釈して新しい意味を問う立場

この整理とカッコ内の記述は、永安（1988）の「最高道徳、三つの過程¹⁵⁾」を手がかりにしている。永安は最高道徳の過程を①価値理想、②（価値の伝達による）価値実現、③

12) 『新版 道徳科学の論文』では、全編にわたって「人類」をみることができる。例えば、「人類の安心・平和及び幸福の実現」（①序 27, 34, ① 80, ④ 141, ⑥ 62, ⑦ 371, ⑨ 14, 105）、「人類の幸福」（①序 74, 76, 103, 106, 111, 129, 136, ① 11, 20, 24, 31, 33, 39, 60, ② 217, ③ 250, 276, ④ 143, 151, 243, ⑤ 9, ⑥ 186, ⑦ 40, 271, 375, ⑧ 50, 116, 229, ⑨ 160, 233, 349, 383）などがある。

13) 「私は信心の最初から己れを捨てて居る貌ではあり、利害関係は一切考えぬという考えであれど、なかなか万事に己れをすつる心使い、利害を考うる（傍注：考えぬ？）心使いができぬ」「己れをすてて居らば、何ら些細の埃もあるべきはずなし」「身をすつる人はすつるにあらずして すてぬ人こそすつるなりけれ」「己れをすてねば助からぬのであることをば、かねて心得て居ります。哀れ神よ、私がるくござります」「廣池信仰日記」「廣池千九郎日記」1冊目、102。「無我の愛というは、己れを捨つることなり。己れをすつるとは、己れの生命、財産、自由をすてて、人類の幸福に資することなり」同、131。

14) 「自分一力で出来ぬ内から自分が思ひたつのはみなほりです。自分で思ひたつ事はお助けをさして頂こうと云う事一つだけです」「自分は只慈悲の心一つにて、人を喜ばせ、人を助け、人を育て、人をいたはる事だけを心がけて」「助け一条の御話」、160。「すべて世界の人々が各自めいめいの許されて居る職務の範囲内だけを立派に誠の心でかたづけてゆけば、逆も外の事を心配する暇はない」同、162。

15) 「最高道徳は三つの過程から成り立っている。第一は「価値理想論」で、聖人が開示した人間にとっての価値理想に範を見出す生き方であり、聖人の道徳を理想とする。第二は、「価値実現論」で、価値伝達論といてもよい。みずから実行した最高道徳を自己自身においてその価値を実現し、それを他者に伝達移植する。自己再帰的、循環的構造がある。第三は、「価値解釈論」で、自他の道徳行為の結果をどのように受け止めるかを扱う。この三つの段階を統合したものが人心の開発救済活動である。」（永安、1988、38）

価値解釈の三つに分けて、③段階の価値解釈を意味解釈に接続すること¹⁶⁾を試みている。

上記①から③までの特徴は、その後の研究において次のような形で扱われる。

2.1.1. 廣池の道徳学で説明された価値や理想を扱う立場

- ・大塚 (1966)¹⁷⁾ の場合：廣池道徳学の説明を中心に行う
- ・下程 (1985/1996/2015) の場合：利己心から慈悲心への立て替えを強調する
- ・岩佐 (2005, 2011)¹⁸⁾ の場合：相互依存・相互扶助ネットワークを強調する¹⁹⁾
- ・永安 (2011)²⁰⁾ の場合：個人は自然，社会，親祖先のいのちとつながる因子をもつ
- ・松浦 (2015)²¹⁾ の場合：自然の法則に対する人間の無力さと法則に一致する可能性を説く

2.1.2. 廣池の道徳学で説明された価値の実現に主眼を置く立場

- ・下程 (1970/1991²²⁾, 1991²³⁾) の場合：意味への意志にもとづく実存性から超越性へ
- ・北川 (1976)²⁴⁾ の場合：硬直した主体性から安らいだ主体性へ
- ・永安 (1988)²⁵⁾ の場合：人は価値と法則からなる意味世界に住み，新しい共同体²⁶⁾を

16) なお、永安論で意味解釈段階が明確に論じられるのは永安 (2006) の「倫理道徳におけるナラティブ・アプローチ」であるが、永安 (1988) にもその兆候は見ることができる。

17) 「広池は人間の本性（本能）、生活（人生）、諸性質、人間生活の意義・目的、人間尊重の思想からなる人間観を持っていた。／人間生活（人生）の意義・目的は、永久の幸福実現にある。永久の幸福実現のなかに人間全体の幸福と個人の幸福とが共に含まれる。／最高品性をつくるのが人間生活（人生）の目的となる。その手段は最高道徳である。／人間の、ことにその精神を尊重する。だからといって、物質的生活を放棄しない。」（大塚、1966, 5-6）

18) 「私たちは、基本的に、すべてとつながっており、自分のすることはすべて他の人と他の存在に影響を及ぼし、また、すべての他の人のすることや他の存在の状況が自分に影響を及ぼすという事実についての確固とした認識を持つ。そのうえで、相互依存のネットワークの一員としての基本的な自覚のもとに、すべての存在の調和と発展をめざし、地球全体のことを自分のこととして考える姿勢が求められている。」（岩佐、2011, 55）

19) モラロジー研究史のなかで相互扶助ネットワークに関する研究には他にも伊東 (2005, 2010, 2011) や服部 (2013, 2015) があるが、いずれもマクロの視点から見た人間観であるため、ミクロの人間観を志向する本論では詳しく扱わなかった。

20) 「自己という個の原因は自己の内部にはない。自己は自己でないものから成り立つ。」（永安、2011, 184）／「個人は、決して孤立したのではなく、外のもの、他のものとつながる無数の恩と縁の集まり」（同、185）

21) 「人間は自分の力で生きているというよりも、大部分は大宇宙・大自然の働きによって生かされている存在ですから、法則を知って、みずから法則に順応・同化し、服従し、その働きをみずから助ける生き方を選ぶことによって、自己を真に生かす道を歩むことができます」（松浦、2015, 134）／「大宇宙・大自然の中で「生かされている」私たち一人ひとは、みずから「生きる」一人の人間としてはきわめて無知であり、無力です」（同、154）

22) 「はりをもって瞬間ごとによく実存的に対決して生きるところに、人間の実存性がある。ここに「快樂への衝動」にしたがう「現実性の原理」に対し、「意味への意志」にもとづく「実存性の原理」が成り立つ／人間は「意味への意志」を人格の最後の核心に宿している。その「意味への意志」が充たされぬ限り、その人の生活は空しく意味なきものであり、そこには「心のはり」も「生き甲斐」も「生きるよろこび」もないのである。かくして「意味への意志」を充たすことは、人間にとって欠くことのできない本質的な要求である。」（下程、1970/1991, 103）

23) 「教育人間学の立場は、一切の人間の在り方を根本原理から演繹する方法に対して、「時間の相のもとに」（sub specie temporalis）下から機能的に、歩一歩人間の全体的本質的構造を究明する。」（下程、1991, 21）

24) 「モラロジーにおける最高道徳的主体性は、実存主義的倫理の緊張した硬直した主体性の意味においてよりも、究極的な庇護性に対する信頼に支えられた主体性、安らいだ解かれた精神的態度を特徴とする主体性の意味に解することによって、その特質をよりよく規定できるのではないか。」（北川、1976, 171-172）

25) 「広池の最高道徳の提唱は、人類に対する包括的な意味体系を開示するものである。」／「人間は「意味世界」（意味のコスモス）に住み、人間の生きる活動とは意味世界を開発し進化させることだが、その場合、意味世界は価値と法則という二つの次元からなっている。」（永安、1988, 35）／「最高道徳における人間の精神の開発と救済は、まさに幸福という「価値」を目指し、人間を支配する「法則」に則り、両者を通じて包括的な「意味体系」（意味のコスモス）を実現していく究極的活動である。またそれによって、新しい人格的生命を基礎とした社

創出する

- ・水野治太郎 (1988²⁷⁾, 2005²⁸⁾ の場合: ケアの倫理によって他者性を内包する自己観を提示する
- ・洪 (2011) の場合: モラロジカル人間観²⁹⁾, 日本文化によらないモラロジー論を提示する
- ・バーコウィッツ (2011) の場合: 発達心理学からモラロジー学習最適期を成人期中期／後期とする, 経験主義的モラロジー教育と構造主義的キャラクター教育を比較する

2.1.3. 廣池の道徳学で説明された価値を解釈して新しく意味を問う立場

- ・水野修次郎 (2000) の場合: カウンセリングのパラダイムは1980年代から構成主義に向かっていることを説明する
- ・永安 (2006³⁰⁾) の場合: オーダーメイド型で構築された物語を相対的に理解する
- ・御法川 (2008) の場合: モラロジー・カウンセリングの確立を試みる
- ・木下 (2017) の場合: 自己反省は一人ではなく, 援助者と共にする時代になっている

2.2. 人間観の拡大と「心理・生物・歴史・社会」的存在としての人間

前項のようにモラロジー研究で扱われてきた人間観・自己観には、①廣池の人間観を説明する立場、②批判的に時代との接点を模索する立場、③新しい視点を取り入れようとする立場があり、時代と共に次第に変化していることがわかる。

水野修次郎 (2008) は現代の対人援助論における人間観から、廣池は「道徳的な人格は知識・徳・誠実さ・慈悲を含み人格の中心に置かれる (略) 利己心を克服できたものだけ

会、すなわち共同体 (ゲメインシャフト) を創出する活動でもある。」(永安, 1988, 37-38)

26) 共同体を扱うものには大野 (2011) もある。

27) 「廣池の創建した独自の体系をもつ道徳学モラロジーはそうした人間の苦悩を癒し、その心を救済する力をもった「抜苦与楽」を目的としたものである。だからホモ・パチエンス (苦悩を耐え忍んでいる人) の人間観がその根底に見据えられていることはいうまでもない。」(水野治太郎, 1988, 51) / 「いかにすれば、人間の深い苦悩を救うことが出来るかという点に狙いがあるといえよう。」(同, 52) / 「ホモ・パチエンスの人間は運命を受容し耐え忍びつつ、結果的に運営を開拓する、ねばり強くかつ柔らかな生き方をとる。だからつねに「安心立命」の心境を開いている。これに対して、ホモ・パチエンス、知的・合理的人間はもっぱら政策・手段に訴えて、効率・能率を重んじ、失敗・挫折すれば悲観するだけで、安心立命がない。」(同, 57)

28) 「自己のあり方を考察しようとするとき、他者との関係を見据えるべきであるというケアの倫理が必然的に登場してくる」(水野治太郎, 2005, 276) / 「コモンモラリティとしてケアの倫理を議論することは、個としての人間存在が他者とどういう関係にあるかを示唆する有益な倫理という視点に立つ」(同) / 「ケアの倫理が最初にあって、そのうえに自己決定の原則が成り立つ」(同)。

29) モラロジカル人間観: 「①すべての生命は兄弟のようだから、人間は人間だけではなく、すべての生命を大切にしなければならない。人間は万物を生成化育する慈悲の心を中心とする最高道徳を実行しなければならない存在である。②すべての生命はそれぞれ歴史的存在だから、人間も歴史によってつくられた存在である。人間は恩人の系列である伝統を尊重し、報恩をしなければならない存在である。③すべての生命に本能的行動が設計されている。人間は刺激を与える環境や教育という鍵を十分に活用して、よりよい自分を作り上げる存在である。人間は、最高道徳と普通道徳の実行による自己修練によって、与えられた本能を制御しつつ自己の運命を改善することができる存在である。」(洪, 2011, 197)

30) 「既製服型の「オーダーメイド」の医療に代わる各人毎の特性に合った医療すなわち「オーダーメイドの医療」を求める人々のニーズに対しふさわしい方法として、「ナラティブ・アプローチ」(物語的方法) が求められている。」(永安, 2006, 99) / 「物語に基づく医療の特徴①患者が語る病の体験の物語をまるごと傾聴し、尊重する。②医療におけるあらゆる理論・仮説や病病態説明を「構築された物語」として相対的に理解する。③異なった複数の物語の共存や並存を許容し、対話の中から新しい物語が創られることを重視する。」(同, 101)

が創造的な人生を送ることができる³¹⁾」と考えて、天照大御神をモデルとした自己反省によって、人は“spiritual”で“biological”な存在の系列につながり、“historical”で“social”な存在としての自己に責任をもてるようになると考えていたことを指摘している。この「心理・生物・歴史・社会」的存在としての自己観・人間観は、現代から廣池の人間観を見直すときに現れるが、この視点は同時にモラロジーの特徴と課題を明確に示している。それは特に、社会性の部分に見出すことができる。

廣池は、『論文』のなかで自然の法則に没我的に従う生き方を選択するように勧めている³²⁾ことから、一見すると人間の向社会的（prosocial）³³⁾な部分には関心を払っていないようにみえるが、そうとはいいきれない面もある。確かに日本の人間観の特質について湯浅泰雄（1976）³⁴⁾が述べる「価値対象に対する献身における心情的純粋性」を強調しているものの、廣池の道徳学は諸法則への没我的な献身が自他共に社会の幸福につながるという確信のもとに築かれている³⁵⁾。したがって、向社会性を含んではいるが、その表現方法に特徴があったと考えられる。

廣池は、個人が自然の法則に同化し、その精神をもって社会の幸福に献身することによって、精神内に安心・平和・幸福の「黄金世界³⁶⁾」が実現し、日本皇室の万世一系を模範とする永続性が保障されると考えた。そのため個人には、廣池の道徳学（モラロジー）を実践・実行して、諸法則・伝統に「同化³⁷⁾」することが道徳的な課題（あるいは進化的課題）となったのである。こうしてみると廣池には、諸法則に同化する／できる存在としての人間観があったことがわかる。この人間観を仮に同化型とすると、ここにモラロジーの人間観の特徴を見出すことができるだろう。

31) “Moral character involves knowledge, virtue, sincerity and benevolence, which lie at the center of one’s character, and is an integrating power for the various higher moral qualities. Only those who master this true self-interest can live out a vital creative life.” (S. Mizuno, 2008, 42-43)

32) 「自我を没却して神に同化せば、おのずから確実なる安心立命を得且つ具体的に幸福を享受し得べし」『論文』⑧ 412 など。

33) 向社会的行動（prosocial behavior）「他者に利益をもたらす自発的な行動全般」『現代カウンセリング事典』2001, 284

34) 湯浅泰雄（1976）「日本の人間観の特質」『比較思想研究』3号, 比較思想学会, 27

35) 廣池は、天理中学校校長時代に生徒に期待する人生観として「吾人は宇宙万有の一部にして、人類同胞の一員なれば、この生命・財産・自由は、ひとりこれを私するべきにあらず、相互の幸福に資して自他共にその幸福を全くすべき」「他人を敬愛するは、人類の義務」と生徒に諭していた。北川治男（2006, 86）

36) 「最高道徳においては、この最高道徳を体得し、且つ実行する人がすなわち黄金世界に到達した」「最高道徳実行者の増加する場合には、その家、その村もしくはその国家は黄金世界に近づいてきつつある」「個人の精神の中に神の心が宿って、その個人の精神が慈悲となり、平和となり、かつ人心の開発もしくは救済をなそうというような精神が生まれましたならば、すなわちその個人の精神内に黄金世界が現れたのであります」『論文』⑨ 第十五章第二十三項「最高道徳はいわゆる黄金世界を実際に現出するものなりや否や」、250-252

37) 「同化」について『論文』には次のような記述がある。「神の心に同化」③ 127, 「最高道徳の重要な原理を理解し、且つ神の慈悲心を体得せるものであったならば、相手方の心をもって己が心となし、その心に同化して生活し、その相手方の精神を救済し、もしくはその精神を慰安しようとする」⑦ 95, 「自我を没却して、神の心に同化し、自然の法則に服従するという精神の確定が神に対する信仰となり、神の慈悲心の体得となり、伝統及び準伝統に対する服従となり、人心の開発もしくは救済をなす精神の原動力となり、最高品性の完成となり、天爵の享受者となり、真に神に救済された人間となる」⑦ 193, 「神の慈悲心に同化」⑦ 243, 397, ⑧ 412, 「精神伝統に同化する」⑦ 368, 「神・聖人及びその正統の学統及び道統の中興の祖に対してはもちろん、その後継者ならびにその補翼者を尊敬してその精神に同化することは、すなわち宇宙自然の法則もしくは天地の公道に合することになるので、これが人類進化の法則に適應する行為であるは明らかなこと」⑦ 370, 「自我を没却して神に同化せば」⑧ 412, 「聖人の心に同化」⑧ 418, 「順応し同化し且つ絶対服従す」⑨ 315

2.3. モラロジー研究史における人間観の特徴と課題

2.3.1. モラロジー研究史における人間観の特徴

ここまで、モラロジー研究史の人間観に焦点を当ててその特徴をみてきたが、それぞれの立場は緩やかに変化しているように見える。まず、第一段階は廣池道徳学の説明と解釈に徹する立場で、廣池が追究した価値理想を扱った。次に第二段階では、批判的に時代との接点を探す試みが行われている。廣池が提示した価値を現代社会のなかで実現することに主眼が置かれた。第三段階では主に専門職倫理の分野で廣池の価値が展開される。この段階では、廣池が問うた価値を解釈して新しい意味を問うようになっている。なかでもモラロジー研究の第三段階へのきっかけは、水野治太郎（1988）であるように見える。

水野は、モラロジー研究にケアの倫理を持ち込むことによって、他者性を内包した人間観を示した。また水野修次郎（2000）は、カウンセリング心理学は個人が自ら意味を構成していくモデルを意味する構成主義に1980年代から向かっていることを紹介して、研究史の時代的変遷と共にモラロジーが目指す価値の実現には経験主義的アプローチ以外にも方法があることを示した。さらに永安（2006）は、「テラーメイド式からオーダーメイド式³⁸⁾」に例えたナラティブ・アプローチを新しい倫理道徳アプローチとして紹介し、物語論をモラロジー研究に導入する試みを行った。その後、専門職倫理としてのモラロジー・カウンセリングの確立に向けた御法川（2008）によって、実践のための理論構築が試みられている。そして、水野修次郎ら（2015）によって日本に社会構成主義とナラティブ・アプローチに基礎を置くサビカスの自己構成論が翻訳されて紹介されると、その刺激を受けた木下（2017）は、心理学で扱われる現代的な自己像である溝上慎一の「二重形成プロセス論」やハーマンスの「対話的自己論」と、キャリア・カウンセリング心理学で扱われるサビカスの自己像との比較と接続を試みた。その結果、「自己は人生の意味をつかむために自己物語の構成を必要とすること、自己反省は共同である時代になっている（木下、2017、18）」と述べている。

こうして振り返ると、永安（2006）によって示された最高道徳へのプロセスをなぞる形で進めてきたモラロジー研究史における人間観・自己観を辿る作業は次のようにまとめられるだろう。①廣池が示した価値や理想を説明する段階では、諸法則に同化する人間観に基づいていた。②廣池が示した価値を実現する段階では、同化する人間観を基礎として、研究者の専門に基づいた解釈が加えられた形で、人間観の新たな展開を確認することができた。それが③段階で、新しい試みが入り入れられるようになると、再び基盤となる人間観が問われるようになった。そして専門職倫理の立場から他者性を内包した人間観が提案されるようになると、諸法則に同化する人間観では、特に対人援助の場面においてモラロジーの理論と実践との間で間隙が生じるようになったのである。その背景には基盤となる人間観が時代の変遷によって変わったことが考えられる。

38) この文脈ではテラーメイドは吊り下げの既製品を指し、オーダーメイドは注文・受注品を指している。本論注30参照。

2.3.2. 現代モラロジー研究における人間観の課題

モラロジー研究史を人間観と自己観に焦点を当てて整理すると、諸法則への同化型人間観があることが確認された。この型の人間観を現代で展開するとどのような課題に直面するのであろうか。ここでは、①他者性②主体性③発達の視点から同化型人間観の課題について検討する。

①他者性

新しい視点を取り入れる時代に入ると、水野修次郎（2008）があげたモラロジーの「生物・心理・歴史・社会」モデルのうち、「社会性」の部分が次第に強調されてきているのがわかる。まず同化型人間観では、大塚（1966）が示すように、人間の生活は自然の法則に合致すること、聖人の教えに基づくこと、本体（神）に信頼すること、によって成り立ってきたと考えられている。この人間観は、自然の法則・聖人の教え、本体（神）への合致や信頼を強調される一方で、他者性には関心を向けていないようである。

課題となるのは、環境（社会）との関わりのなかで生きる心理社会的自己像のうち、他者性の軽視につながることである。確かに北川（1976）が述べたように「最高道徳的主体性は、『実存的主体性』と『社会的連帯性』が相即一体となるところに、さらにもうひとつの特質が見出される（北川, 1976, 175）」が、しかしその背景には下程（1970/1991）が指摘する「超越即現実」が必要条件とされていることを看過できない。超越との密接な関わりによって、その副作用として社会性、特に他者性に関心が向きにくいことは現代の専門職倫理の分野などで展開する際に課題となる。したがって、相互依存ネットワーク（岩佐, 2005）を理論的背景として強調することによって、相互依存による超越への橋は架かることはあっても、社会のなかで生きる自己の他者性には光が当りにくく、実践的な課題は残る³⁹⁾⁴⁰⁾。

②主体性

同化型人間観は受動的人間像を強調⁴¹⁾して、個人の主体性を「伝統」に準じるかたちで位置づける。廣池の人間観を説明する立場では、例えば松浦（2015）のように歴史的・生

39) 例えば伊東（2018）は、超越には垂直的な超越（神、絶対無など）と水平的超越（自己と他者、自己と自然）があるという。水平超越（Horizontal Transcendence）とは、「宗教の根源を、従来のように縦の垂直的超越（上への超越としての「神」と下への超越としての「無」etc.）によるのではなく、自己と他者、自己と自然との間の絆をつくる横への超越」（伊東「世界宗教と科学」33-34）を指しており、「第一次的に重要（同, 38）」であるとする。さらに水平超越は横への超越（lateral transcendence）でもあり「他者との相互関係を自覚し創り上げる（同）」ことを意味し、「縦への超越のみにとどまっていたよいか（同）」と指摘している。

40) 「他者性」に焦点を当てた研究には水野治太郎（2008）がある。水野は、「垂直的な絶対神あるいは超越的な聖なるものとの結びつき、さらにこれに加えて水平の原理、自己中心を超越して他者に関わる倫理、この二つの原理を統合する形で、人間社会・国家・国際関係の場の倫理原則を導いていくという構想」を廣池（1928）は『論文』で取り組んでいた（水野, 2008, 4-5）という。しかしながら、水野は大学で40年にわたって学生に『論文』の内容を「いかに合理的に、わかり易く」伝えるかを取り組むなかで「時代の変遷は歴然としていて、多少の手直しくらいでは、如何ともし難い、大きな壁を痛感するに至り（同, 6）」、「新たなモラルサイエンス構想（同, 6）」に進むようになった。そのなかで新しい柱の一つにこの「他者性」がある。水野（2008）では「ケアという人間の営みを公共性と関連させて（同, 189）」展望しており、「公共政策への示唆（同）」を今後の課題とする。「まだ研究がスタートしたばかりで、緻密な議論はこれからだ（同）」としており、「他者性」の問題は引き続きモラロジー研究の課題だといえるだろう。

41) プロンプトネス（命令一下、即時断行：『論文』⑦32, 200）。順応同化絶対服従（『論文』①序36, ⑧432, ⑨281, 315）。

物的人間観から、自然の働きの前では人間は無力であるから諸法則への同化が必須であると説明される。

近年では、例えばサビカス（2011/2015）の自己構成論では、自己の主体性は援助の対象であり、問題解決に必要な柔軟性の基盤として欠かせないものとして扱われている。モラロジーの教育活動においても、主体性の軽視の問題は「没個性的な傾向⁴²⁾」として言及されてきた。このことは、バーコウィッツ（2011）も「モラロジーを推奨する学校では、上下関係のない管理体制や、低い地位の人に力づけること、民主的な教室や学校をつくりだすことにはあまり関心が払われていない（同、304）」と指摘している。自己の主体性を信頼し自己選択・意志決定による自立・自律を目指すことは、モラロジーの現代的展開において理論・実践の両面で課題として残っている。

③発達

同化型人間観は人間の利己心を悪と見ることで人間性の「ネガティブ（バーコウィッツ、2011、300）」な面に焦点が当たりやすい。モラロジーの教育は、自己反省と伝統の尊重によって「すでに最高道徳を確立した人物による直接的な指導などが必要（同、300）」とされるために模範となる人間モデルは単純化し、生き方を多様な他者から学ぶ機会は限定される。これはバーコウィッツが指摘する「明らかにされた真実を受け入れていくモデルに近い（同、308）」ものであり、「基本的な人間性やその成長について多くを見落としている（同）」といえるだろう。

この単純化された人間モデルは、成熟または完成した人間を模範とするために、人間の成長・発達の概念が乏しい特徴がある。発達心理学からみると「青年期は自我を没却するのに適した時期とはいえない（同、302）」し、「成人期前期は、主に自己を他者と共有することについて学ぶので、この時期もまだ早い（同）」ことから、モラロジーの学習は「成人期中期、あるいは後期⁴³⁾がおそらく最適ではないか（同）」といわれるように、学習準備性が整う前段階でモラロジー教育を展開するには、工夫が求められる。このことは生徒を対象とした調査にも現れている⁴⁴⁾。

このように、廣池の人間観に基づくモラロジー研究史からは①他者性②主体性③発達の軽視による人間モデルの単純化を課題として確認することができる。

42) 廣池千太郎は『廣池千英選集』（1969）で「巨大すぎるモラロジーのカサのもとで、没個性的方法、つまり集団主義が行われてきたといえる」「今後は人間尊重を現実に打ち出すべく、一人ひとりの性能に合った方法をいかに体制化するかを考案して、実施に移して行く」と述べており、主体性の軽視を没個性的方法と批判した。

43) バーコウィッツ（2011）の成人期中期／後期がどの年代を指すかは明確ではないが、参考として Levinson（1978）は中年期を45-60歳としている。また、現代発達心理学の二宮ら（2006/2012）は成人期中期（45-65歳）、成人期後期（65歳-）としている。

44) 例えば、麗澤高等学校寮長の3年生への聞き取り調査では「平均的・没個性的な人間をつくっている」、「カリキュラム編成が社会の要請とかけ離れている」、「高校生の段階にマッチしたモラロジー教育がほしい」などがある。『麗澤教育の未来像 資料編』（昭和45（1970）年11月調査）

3. 同化型人間観と自己構成論の比較

次に自己構成論によるこれらの課題への応答可能性について検討したい。同化型モデルが単純化された人間観につながる背景には「環境から施された真実の知識を受動的に受け入れる経験主義の考え方（同，308）」があるとパーコウィッツは指摘している。この経験主義的な人間観は、構成主義を取り入れる試みによって、オープンエンド⁴⁵⁾な人間観・自己観に接近していくことができる。構成主義とは人間を「自らの経験をつくりそれらを解釈する能動的な役割を持った進化する有機体（同，308）」とみる立場であり、人間は能動的な自己、経験をつくり解釈する主体、発達する主体として扱われる。

この視点は、モラロジー研究史において永安（2006）が提案した第三段階にあたる「意味解釈」を発展させた「意味創造（meaning making）」の段階として第四段階に位置づけることができるだろう。他者性、主体性と発達、経験をつくり解釈する主体としての自己観が第四段階の自己観の特徴になる。

本章では、理論基盤に社会構成主義とナラティブ論をおくマーク・サビカスの自己構成論を取り上げ、廣池の同化型人間観と比較する。自己構成論は、キャリアの心理学に位置づけられる対人援助アプローチである。そこでは他者性、主体性、発達が扱われている。

3.1. 自己構成モデルの文化史的位置づけ

自己構成モデルは、文化史のなかではポストモダンに位置づけられる。下図でその位置づけを確認する。

図1（マクレオッド，1997/2007）は、ポストモダン（21C）時代における個人概念の特徴が整理されており、同化型人間観と構成型自己観の特徴がわかる。特に廣池の同化型人間観が18C以前の伝統文化期の特徴と19Cの近代の特徴を合わせ持つことを確認できる。

個人主義化しはじめた19世紀に生きた廣池は、個人主義に対して共同体・家族志向に論を張っている。他にも、独立した自律的自己ではなく、身分や階級などの外的要因による自己規定や、宗教ではなく科学志向。モラルの相対性ではなく確実性。変化しない社会から進歩に向けて取り組む社会。農作業・牧畜労働から産業労働など、廣池の道徳学は時代・文化の影響を受けている。

廣池以後のモラロジー研究史では、他者性が指摘されるようになり、「関係的」人間像が強調されるようになる。図1で確認できるように、自己構成モデルはポストモダン時代の自己観の特徴である。他者性を含む「関係的」な自己は、断片的で「飽和」しており、未完の状態が常態となっている。自己は、主体的に自分の人生を構成する存在として扱われる。宗教や科学を信じるのではなくて、知識は社会的に構成されていることを信じて、

45) はっきりとした目的や答え、終わりの時間がないことを指す。（参考：Open-ended: 1. something that is open-ended does not have a definite answer or definite rules about how it must be done. 2. without a particular ending time. ロングマン現代英英辞典 <https://www.ldoceonline.com/jp/dictionary/open-ended,2018/09/26> 確認）

図1：個人の概念に関する文化小史

伝統文化時代（～18C）	近代（18～20C）	ポストモダン（21C）
共同体・家族志向	個人主義的	「関係的」自己意識
外的要因による自己規定	他から独立した自律的自己	断片的で「飽和した ⁴⁶⁾ 」自己
名誉の重視（身分・階級）	尊厳の重視（自己実現）	構成の重視（自己構成）
宗教を信じる	科学を信じる	知識が社会的に構成されていることを信じる
モラルの確実性	モラルの相対性	モラルの枠組みの追求
変化しない社会	進歩に向けて取り組む社会	グローバル化社会
農作業・牧畜労働	産業労働	サービス・情報処理労働

マクレオッド（1997/2007）を一部改編

図2：同化型モデルと自己構成モデルの比較

	同化型モデル	自己構成モデル（サビカス，2015による）
対象	価値・理想	意味・現実
援助法	内在化（反省を促し慈悲心を喚起する）	外在化（言語による ⁴⁷⁾ ）
因果律	法則に従う。進化と退化に影響	ストーリーのなかにある（例：寂しさを勇氣に）
目的	品性の完成	自己概念の完結
内省	神の心を標準に反省する	経験を内省 ⁴⁸⁾ して自己を構成する
来談時	運命の衰退	社会とのズレ（dislocation）を感じたとき
人間観／自己観	利己的（悪）、埃にまみれて罪深い／生物歴史的自己	企画体、意識を自覚し自己を構成する ⁴⁹⁾ ／心理社会的自己
転機の見方	恩寵的試練	人生の新しいページが始まる

46) 「私たちが今まさに生きているポストモダンの時代においては、また別の人間観が再構成されつつあります（マクレオッド，1997/2007，11）。『社会哲学者のケネス・ガーゲン（略）が提案した〈飽和した自己〉（saturated self）という概念は、今世紀末の高度資本主義経済下における生活の本質的な特徴を言い当てています（同）。ポストモダンを生きる人は、『さまざまな情報の洪水に見舞われて、一つの生活を無数の観点から眺める機会が無限に与えられて（同）飽和している。そのような状況では『人は自分自身のことをその場その場で異なった自己として経験』する。一人の人が『他者や他の集団から一貫した全体像として把握されることはない（同）。これらは『自己の断片化（同）』を招いている。

47) 外在化：キャリア構成理論では「本質的な自己の実現ではなく自己の構成に集中する」（サビカス，2011/2015，27）。『言語が自己概念を形づくり、自己を構成するのに必要な言葉を提供する』（同）と考えており、言語による外在化が援助方法になる。

48) 内省：言語を用いて行い『内省性から生じる自己への気づきを適切に位置づけるため』にも言語を用いる。言語は『言葉によって過去を保ち、未来を予測しながら自己を包含する』（同，27）。人は『話すことによって自分自身を実存のものとするが、自己を構成するために、人は経験、特に対人関係の経験を必要とする』（同）

49) 人間観／自己観：『自己は外側から内に向かって作られる』（同，28）。自己構成論において自己は『文化的に形づくられ、社会的に構成されて、言語によって語られて発現した意識』（同）なのである。したがって、自己という考えは『意味づくりのプロセスのなかで生まれる』（同）。『経験を語るストーリーによって成り立っている』（同）。『言語を通じて自意識的に内省することが自己を構成するプロセスであり、その結果として生まれるストーリーは、自己を構成する内容』（同）となる。

モラルの枠組みを追求し、サービス・情報処理労働に従事する。現代では、人生の意味をつくることは個人に課せられているために「意味創造 (meaning making)」が時代の要請といわれるようになっていく。

3.2. 同化型モデルと自己構成モデルの比較

図2で廣池の同化型モデルと「意味創造 (meaning making)」の人間観を比較すると、同化型モデルが価値や理想を追求するのに対して、自己構成モデルは意味と現実を追求している。援助方法として言語を用いることは共通するが、内在的に自己反省して品性完成を目指す同化型モデルと、外在化して断片的なストーリーに一貫性を見出して大きなストーリーを共構成して自己概念の完結を目指す構成モデルでは援助方法に違いがある。

構成モデルにおける内省は、対人関係の経験を振り返り、未来を予測しながら自己を位置づける。また、個人・自己に影響を与える存在として家族を扱うことは両者に共通するが、構成モデルには次の特徴がある。

3.3. 自己構成モデルの人間観の特徴

サビカスの自己構成理論では、個人に影響を与える人を Influences⁵⁰⁾として扱う。自己構成モデルは Influences をガイドとロール・モデルに区別する。親はガイドでありロール・モデルとして扱われることはない。親を人生のガイドと扱うのは、個人・自己にとって親は生まれながらにして、すでに取り入れ (introjection, take in) られて内面化しているからである。自分自身が選択して取り込んでいるわけではない。(主体性)

一方でロール・モデルは親とは違い、外的な存在として個人が自由に選択して、自分が反映しているイメージや特徴を組み込み (incorporation)、身につける (take on) ことができる。ガイドが知覚対象として心に蓄積された人々の代理象徴であるのに対して、ロール・モデルは、人を変容させて、自己を構成する概念として組み込まれていくと考えられている。(他者性)

同一化 (identification⁵¹⁾) は、意識的・無意識的に関わらず自己を他者に似せて変化させることを含んでいるため、青年期と成人期の初めに自分が選んで同一化したものすべてを整合性のある全体へと一体化する。(発達) この一体化は「合算 (sum up) ではなく総合 (synthesis⁵²⁾) であり、成長に対する総合的な解答を生み出すための複数の抽象的概念を調和させた一つの形態 (configuration) (サビカス, 2011/2015, 123-125)」と説明される。このように、自己構成モデルの人間観では、ガイドとロール・モデルの説明のなか

50) Influences: Form of internalization in which introjected parental guides are taken in whole and stored in the mind as percepts. (Savickas, 2019, 162)

51) Identification: Form of internalization in which incorporated characteristics of role models are taken on and stored in the mind as concepts. (Savickas, 2019, 162)

52) Synthesis: the act of combining different ideas or things to make a whole that is new and different from the items considered separately. Cambridge Dictionary, <https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/synthesis#dataset-cacd>, 2018.10.9

で同化型モデルに残された①他者性、②主体性、③発達の課題を扱っている。

4. 今後の課題と展望—セルフ・アイデンティティとアダプタビリティ

同化型モデルの人間観が抱える課題を克服し、モラロジー研究の現代的な展開に向けて、自己構成的人間観・自己観を参考にするとところは多いように思われる。一方で、自己構成論的な対人援助の日本文化への適応もまた今後の課題として残されている。

本章では、対人援助論（特にカウンセリング論）で注目を集めているアイデンティティとアダプタビリティを取り上げ、今後の課題と展望の明確化を試みる。

4.1. 自己構成論における自己の位置づけ

価値理想の追求から価値実現、価値解釈の時代を経て第四期に入ったモラロジー研究は、意味を創造 (making meaning) する存在として自己を位置づける。サビカス (2011/2015) は、この自己を企画体 (self as project) と説明している。キャリア支援の領域では企画体としての自己が提唱されたのはポストモダン時代からで、それ以前は客体や主体として扱われていた。図3は、キャリア支援の方法とその特徴を比較したものであるが、自己の扱い方が異なることに注目したい。自己の扱いは客体、主体、企画体と変化している。

ガイドにあたる職業ガイダンスはフランク・パーソンズ (1909) が『職業選択』を著したことに始まる20世紀初頭の職業指導を指し、自己は客体として位置づけられた。キャリア教育では行為主体としての自己は発達する主体に位置づけられる。自己構成論に立つキャリア・カウンセリング (ライフデザインカウンセリング⁵³⁾) が提唱されるようになると、自己は著作者や人生を企画する主体として扱われ、内省⁵⁴⁾によってストーリーを構成する主体となった。

4.2. 自己構成論におけるセルフとアイデンティティの関係

自己構成論では、自己 (Self) とアイデンティティは明確に区別される。自己はアイデンティティではなく、アイデンティティよりも大きい。サビカス (2019) は、アイデンティティを次のように説明している。

「アイデンティティは社会の役割との関係のなかで自分自身をどのように考えるかを意味する (Savickas, 2019, 18)」。

「役割の中の自分や役割アイデンティティは、社会の状況や環境のコンテキストのなか

53) Savickas, et al. (2009) は、ライフデザインカウンセリングの前提条件を5つ挙げている。①特性から文脈②処方箋からプロセス③直線の因果律から非直線的なダイナミクス④科学的事実からナラティブのリアリティ⑤記述からモデリング、である。

54) Reflexivity: A second-order cognitive process of strong evaluation, that is, self-conscious evaluation of conscious knowing to determine alternate ways of acting in the future. It is prospective and connects the present to the future. (Savickas, 2019, 163)

図3：キャリア支援の方法と特徴（サビカス、2011/2019）

ガイド (Guiding) ⁵⁵⁾	発達 (Developing) ⁵⁶⁾	構成 (Constructing) ⁵⁷⁾
演技者 (actor)	行為の主体 (agent)	著作者 (author) ⁵⁸⁾
数値	ステージ	ストーリー
特性	課題	テーマ
相似性	レディネス	内省性
マッチング	実行する	構成する
客体	主体	企画体

で社会的に構成された自己定義である（同）。

「自己 (Self) は、環境から与えられる役割に出会って、アイデンティティを形成する。アイデンティティは、心理社会的な自己と社会的な文脈によって共構成される（同）。

このアイデンティティ論の背景⁵⁹⁾には、ポストモダン以後本質的な自己 (Essential Self) は先天的には存在しないという考えに置き換えられた (Savickas, 2012, 14) ことがある。本質的な自己 (Self) が存在すると考えた近代（特に 20 世紀後半）では、自己実現が可能だと考えられていたが、その自己が先天的に個人の内には存在せず、社会のなかで構成されるものと考えられるようになると、自己実現と自己構成は根本的に異なることになる。

サビカスは、自己構成論のアイデンティティをナラティブによって形成・説明される (Savickas, 2012, 2019) と考えており、ナラティブ・アイデンティティ⁶⁰⁾と呼ぶ。自己理解はストーリーのなかであって、アイデンティティについてのナラティブは自己がどのように社会へ適応しているかを理解させてくれる (Savickas, 2019, 21)。

アイデンティティがナラティブによって形成されていることは、人生もまたナラティブやストーリーによって形成されることを意味する (Savickas, 2019, 24)。ストーリーとしてのキャリア論といえよう。マクロ・ナラティブは人生のライフ・ストーリーを示しており、すべてが思い通りに進むわけではない私たちの人生にはストーリーが必要不可欠であ

55) Vocational guidance: Career counseling intervention that uses inventories and information to match individuals with fitting positions. (Savickas, 2019, 163)

56) Career education: Career counseling intervention that uses education methods to teach students how to cope with imminent tasks of vocational development. (Savickas, 2019, 162)

57) Career construction: Career counseling intervention that uses autobiographical narratives to script the next episode in a career. (Savickas, 2019, 161)

58) Savickas (2011b) "The counselor's job is not to interpret the stories but rather to help clients listen for the wisdom they are authoring in telling about the self and preferred setting, the script that they wish to live, and their own advice about how to begin to make a way forward."

59) 心理学研究で扱われる自己・アイデンティティの扱い方の変遷は、木下 (2017) を参照されたい。「自己形成研究からみたアイデンティティは、統合された変化の少ないものであったのに対して、変化の激しい現代社会の自己・アイデンティティは環境の影響を受けて変わりやすいものとして捉えられるようになっている」(木下, 2017, 18)。

60) Narrative identity: "Internalized and evolving life story that a person begins to develop in late adolescence to provide life with meaning and purpose" (MacAdams & Olson, 2010, p. 527) (Savickas, 2019, 163)

る。

ストーリーには不測の事態への適応も含まれており、職業上のリストラや課題、労働環境の変化や転機、ワーク・トラウマへの不安や怒りの感情への対処法を示唆する(Savickas, 2019, 13)。環境への適応はストーリーのなかで示されていることがあるために、サビカスはキャリア支援の場面では「ストーリーを聞くこと」を“listening to a story”ではなく、“listening for a story”⁶¹⁾として強調している。この語句は、まだ言葉になっていないストーリーに耳を傾けて、対人援助者(カウンセラー)と共同で形づくっていく(構成していく)(Savickas, 2011b)ことを意味している。

4.3. アダプタビリティ

サビカスの自己構成論では、キャリア上の転機に対応するための心理社会的な尺度が用いられる。この尺度はCAAS (Career Adapt-Abilities Scale) などと呼ばれ、関心(Concern)、統制(Control)、好奇心(Curiosity)、自信(Confidence)を測定する。CAASを用いた研究には、Porfeli & Savickas (2012) や13カ国での調査を行ったSavickas & Porfeli (2012) などがある。

また、広範囲にキャリア適応性の文献調査研究を行ったJohnston (2018) は、CAASだけではなくサビカスのキャリア適応概念を基盤に置く8つのキャリア適応尺度を比較している。Johnston が今後の課題としているのは、測定可能で明確な理論構築と、各尺度間における用語の明確化を含む新しい尺度の開発である。さらに、言語や文化の独自性を考慮することも課題である。例えばアイスランド(2012)では、4Cの他に協力(Cooperation)、貢献(Contribution)が意味あるものと考えられており、尺度に加えられた(Johnston, 2018)。他にも、オランダ(2012)、ポルトガル(2012)、中国(2012)の調査でも言語や文化の独自性を考慮した尺度の修正が求められている。

4.4. 課題と展望

先天的に自己が存在し、自己実現をゴールに設定した時代を経て、ポストモダンに入ると、状況や文脈などの環境から要請される役割と自己との間でナラティブを通してアイデンティティを構成していると考えられるようになった。こうして自己論やアイデンティティ論は環境との適応の問題として立ち現れてきた。したがって、適応を支援・援助することは、同時に自己・アイデンティティの構成を共に行っていることを意味するようになっている。今後、日本文化における自己構成論の展開において、適応の測定尺度や見立ての修正(日本化)は課題となるだろう。

最後に、今回は廣池以後のモラロジー研究史における人間観・自己観の変遷に焦点を当てたため、廣池自身に焦点を当てた人間観の検討は今後の課題としたい。

61) Listening for a storyについては、サビカス(2011b)に詳しい。出典は、小説家Eudora Welty(1983). *One writer's beginnings*. Cambridge, MA: Harvard University Press. である。

参考文献

- Berkowitz (2009/2013). Social science, Philosophy, and Education: A Necessary Meeting of Disciplines. 『モラロジー研究』70号. モラロジー研究所, 107-122. マーヴィン・パーコウィッツ (2009/2011)「社会科学、哲学、そして教育」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績』モラロジー研究所, 287-312.
- Chikuro Hiroike (1942/1966). The Characteristics of Moralogy and Supreme Morality, New Revised Edition. The institute of Moralogy.
- Claire S. Johnston (2018). A Systematic Review of the Career Adaptability Literature and Future Outlook. *Journal of Career Assessment*, 26 (1) 3-30.
- Daniel, J. Levinson (1978). The seasons of a man's life. New York. ダニエル・レビンソン (著) 南博 (訳) (1992)『ライフサイクルの心理学 (上)』講談社
- Graham B. Stead (2014). Social Constructiionist Thought and Working. The Oxford Handbook of the Psychology of Working. Oxford University Press, 渡辺三枝子監訳『キャリアを超えてワーキング心理学 働くことへの心理学的アプローチ』白桃書房, 46-61.
- John McLeod (1997). Narrative and Psychotherapy. London: Sage Publications. ジョン・マクレオッド (著) 下山晴彦 (監訳) (2007)『物語としての心理療法—ナラティブ・セラピーの魅力』誠信書房
- Porfeli, E. J. Savickas, M. L. (2012). Career Adapit-Abilities Scale-USA form: Psychometric properties and relation to vocational identity. *Journal of Vocational Behavior*. 80. 748-753.
- Savickas, M. L. Nota, L. Rossier, J. Dauwalder, J. Duarte, M. E. Guichard, J. Soresi, S. Esbroeck, R. V. Vianen A. E. M. (2009). Life designing: A paradigm for career construction in the 21st century. *Journal of Vocational Behavior*, 75, 239-250.
- Savickas, M. L. (2011). Career counseling. Washington, DC: American Psychological Association. サビカス (著) 日本キャリア開発研究センター (監訳) 水野修次郎 (訳) (2015)『サビカス キャリア・カウンセリング理論 〈自己構成〉によるライフデザインアプローチ』福村出版
- Savickas, M. L. (2011b). Constructing careers: actor, agent, and author. *Journal of Employment counseling*, 48, 179-181.
- Savickas, M. L. (2012). Life Design: A paradigm for career intervention in the 21st century. *Journal of counseling & Development*, 90, 13-19.
- Savickas, M. L. Porfeli, E.J. (2012). Career Adapt-Abilities Scale: Construction, reliability, and measurement equivalence across 13 countries. *Journal of Vocational Behavior*. 80. 661-673.
- Savickas, M. L. (2019). Career counseling second edition. Washington, DC: American Psychological Association.
- Mizuno S. (2008). The Self-examination of Dr. Chikuro Hiroike and its Application to Counseling. *Studies in Moralogy*, 61, 29-50.
- 伊東俊太郎 (2005)「『精神革命』とその現代的課題」『モラロジー研究』55号. モラロジー研究所, 1-32.
- 伊東俊太郎 (2010)「『精神革命』と自然の問題—廣池千九郎の意義」『モラロジー研究』65号. モラロジー研究所, 29-39.
- 伊東俊太郎 (2011)「『精神革命』の時代と廣池千九郎のモラロジー—残された問題としての『自然』」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績』モラロジー研究所, 17-29.
- 伊東俊太郎 (2018)「世界宗教と科学」金子務監修、日本科学協会編『科学と宗教 対立と融和のゆくえ』中央公論新社, 33-47.
- 岩壁茂 (2010)『はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究』岩崎学術出版社
- 岩壁茂、奥村茉莉子、金沢吉展、野村朋子 (2018)「心理職の『実践的総合力』の習得に向けて」『50

- 周年記念研究助成論文集』明治安田こころの健康財団, 1-43.
- 岩佐信道 (2005) 「相互依存・相互扶助ネットワークにおける人間の生き方」『グローバル時代のコモ
ンモラリティの探究』モラロジー研究所, 249-274.
- 岩佐信道 (2011) 「倫理道徳と最高道徳」『現代の倫理道徳 Q&A』モラロジー研究所, 50-55.
- 大塚真三 (1966) 「<道徳科学の論文> 第一巻第 14 章にみられる広池千九郎博士の人間観」『広池千九郎
博士生誕百年記念論文集』, 道徳科学研究所, 1-46.
- 大野正英 (2011) 「廣池千九郎における共同体の概念と伝統の原理」『2009 年モラルサイエンス国際会
議報告 廣池千九郎の思想と業績』モラロジー研究所, 262-286.
- 北川治男 (1976) 「最高道徳的主体性の特質」『モラロジー研究』4 号. 広池学園, 149-177.
- 北川治男 (2006) 「廣池校長の生徒指導観②」『廣池千九郎の行迹 77 篇』, モラロジー研究所, 86-88.
- 木下城康 (2017) 「サビカス ライフデザインカウンセリングにおける自己構成の特徴」『モラロジー研
究』80 号. モラロジー研究所, 1-19.
- 國分康孝監修 (2001) 『現代カウンセリング事典』金子書房
- 下程勇吉 (1970/1991) 『増補宗教的自覚と人間形成』広池学園
- 下程勇吉 (1985/1996/2015) 「普遍的道徳の開拓者 廣池千九郎」『廣池千九郎の人間学的研究』モラロ
ジー研究所
- 下程勇吉 (1991) 「人間生成論」『麗澤大学紀要』52, 麗澤大学, 21-45.
- 洪顕吉 (2011) 「韓国におけるモラロジー受容に関する一考察」『2009 年モラルサイエンス国際会議報
告 廣池千九郎の思想と業績』モラロジー研究所, 186-199.
- 橋本富太郎 (2015a) 「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論 (二) —研究史前篇—」『モラロジー研究』
74 号. モラロジー研究所, 35-56.
- 橋本富太郎 (2015b) 「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論 (三) —研究史後篇—」『モラロジー研
究』75 号. モラロジー研究所, 29-49.
- 服部英二 (2013) 『未来を創る地球倫理—いのちの輝き・こころの世紀へ』モラロジー研究所
- 服部英二 (編著) (2015) 『未来世代の権利—地球倫理の先覚者、J-Y・クスター』藤原書店
- 廣池千太郎 (1969) 序文『廣池千英選集』廣池学園
- 廣池千太郎 (1990) 『廣池千太郎選集』廣池学園
- 廣池千九郎 (1912.10.15) (1912.11.12) 「廣池信仰日記」『廣池千九郎日記』1 モラロジー研究所 (編)
(1985), 99-105, 129-136.
- 廣池千九郎 (1922) 『助け一條の御話』, 印刷製本 (1956)
- 廣池千九郎 (1928) 『道徳科学の論文』(新版 9 冊, 1985, 1986, 1987, 1988)
- 廣池学園 (1974) 『麗澤教育の未来像 資料編』(昭和 45 (1970) 年 11 月調査)
- 二宮克美、大野木裕明、宮沢秀次 (編) (2006/2012) 『ガイドライン 生涯発達心理学 [第 2 版]』ナカ
ニシヤ出版
- 松浦勝次郎 (2015) 『真に意味ある生きる道』モラロジー研究所
- 水野治太郎 (1988) 「廣池千九郎の人間観」『モラロジー研究』27 号, 広池学園, 37-64.
- 水野治太郎 (2005) 「ケアの心と総合の知-自己と他者の関係性を問う倫理」『グローバル時代のコモ
ンモラリティの探究』モラロジー研究所, 275-289.
- 水野治太郎 (2008) 『『経国済民』の学—日本のモラルサイエンス研究ノート』麗澤大学出版会
- 水野修次郎 (2000) 「人間探究の方法と複数のリアリティ」『モラロジー研究』48 号, 広池学園, 33-58.
- 御法川誠次郎 (2008) 「モラロジー・カウンセリングの確立をもとめて」『モラロジー研究』61 号, モ
ラロジー研究所
- 永安幸正 (1988) 「廣池千九郎と最高道徳の構造」『モラロジー研究』26 号, 広池学園, 31-71.
- 永安幸正 (2006) 「コモン・モラルと専門倫理の探究」『倫理道徳の白書 Vol. 1』モラロジー研究所, 77
-124.

- 永安幸正（2011）「個人」『現代の倫理道德 Q&A』モラロジー研究所，183-193.
モラロジー研究所編（1973）『資料が語る 廣池千九郎先生の歩み』廣池学園
湯浅泰雄（1976）「日本的人間観の特質」『比較思想研究』3号，比較思想学会，24-28.

（キーワード：人間観・自己観、意味創造、自己構成論）